

論文

20世紀転換期における米国南部ペン学校の 教養教育から実業教育への転換

Connotations of the Shift from Liberal Arts Education to
Industrial-Agricultural Education in Penn School in the U.S.
South during the Turn of the Twentieth Century:

—南アフリカにおけるアフリカ人の教育モデル移植の背景として

Historical Backgrounds of Implantation of American Black Educational
Model for Native Africans in South Africa

荒木 和華子¹

ARAKI Wakako

This paper examines connotations of the shift from liberal arts, academic education (educational type upheld by W. E. B. DuBois) to industrial-agricultural education (educational type practiced by Booker T. Washington) in the case of Penn School in South Carolina in the United States during the turn of the twentieth century in order to understand the historical backgrounds of implantation of American southern Black educational model for native Africans in South Africa. By looking at both cases of educational implantation at Penn School and South Africa at the turn of the twentieth century, a complex intentions and goals of white educators and Black and African leaders that were political emerged within discourses to (economically and not politically on surface) “uplift” black races through industrial-agricultural education.

キーワード： ペン学校、黒人教育モデル、ブッカー T. ワシントン、職業訓練、農業・産業・実業教育、W. E. B. デュボイス、教養教育、南アフリカにおけるアフリカ人教育

Key words: Penn School, Black Education Model, Booker T. Washington, Vocational Training, Industrial-Agricultural Education, W. E. B. DuBois, Liberal Arts Education, Education for Africans in South Africa

「もしわれわれが、黒人問題の一時的偶発的現象から、アメリカの黒人をいかに永続的に向上させ開化させるかという大きな問題に目を向けるならば、物質的進歩にたいする熱狂が高潮に達している今、われわれは次のように問う権利をもっている。結局のところ職業技術学校は、黒人人種の訓練において最終的で十分な解決策となるであろうか？われわれは、静かにしかし全くの真心をこめて、人間の全時代を通じてつねに繰り返し提起される次の質問を発する権利を保持しているのだ。生命

1 新潟県立大学国際地域学部 (arakiw@unii.ac.jp)

は肉以上のものでは、そして身体は衣裳以上のものではないのか?と。そして、今日人びとは最近の教育運動のなかに不吉なきざしが見えるために、ますます熱心に上述の質問を發するのである。」

W. E. B. デュボイス¹

1 はじめに

米国19世紀末に黒人のための教育のあり方をめぐって、二人の代表的な米国の黒人教育者による異なる見解が存在した²。W. E. B.デュボイスによる「才能ある十分の一」(the Talented Tenth)の主張に代表されるような黒人エリート養成のための高度なレベルの普遍的な教育の必要性の主張と、ブッカー・T. ワシントンによる産業・農業等の職業訓練教育や基礎レベルの教育の機会をより多くの黒人に提供することをめざす教育論の間には一見大きな乖離が存在している。実業教育重視のワシントン型教育、対するリベラル且つ伝統的な教養教育重視のデュボイス型教育と呼び換えて、これらを対立構図として捉えてもよいかもしれない。奴隷解放後の黒人たちを貧困農民としてプランテーションに縛り付けるシェア・クロッピング制度が定着し、ジム・クロウと称される人種隔離制度が確立し、そして白人至上主義者による黒人に対するリンチが頻発し、その被害の深刻さ故に黒人史上の「暗黒期」と呼ばれた20世紀転換期南部社会に暮らしたワシントンは、黒人がまともに生き抜く最善策として、手に職をつけ経済的に自立して生計を立てるために教育によって黒人コミュニティが社会的に上昇(uptift)することを重視した³。しかしながら、同時にワシントン型の実業教育は「教育の再生産論」を引用するまでもなく、当時の社会の支配層である白人にとって都合のよい「従順な」黒人労働者を育成するための教育内容であったがために、これまでデュボイス型教育を推進する黒人指導者や研究者の多くから批判されてきた。

周知のように、1895年9月18日のアトランタ博覧会における「今いる所で、バケツを投げ下ろせ」(“cast down their buckets”)という有名なくだりによって黒人たちに人種差別の現状に対する忍耐を訴えたワシントン演説は、「アトランタの妥協」と呼ばれて黒人運動の活動家たちから批判されてきた⁴。しかし同時にワシントンはそのような人種間の協調を説いたからこそ、当時の大統領はじめ白人一般の民主党・共和党両支持者たちからも絶大な支持を得て、南部における黒人指導者として確固たる地位を築いたのであった⁵。ワシントンは白人たちから信頼されて南部の代表的な黒人学校であるアラバマ州のタスキーギー学院のトップの職位を与えられたのである。黒人が現状不満から政治的要求を行うことについて消極的で、融和的な人種関係を主張するワシントンとは異なり、北部のマサチューセッツ州出身で博士号保持者であり社会学・歴史学に関する大著を残したデュボイスは、黒人にも白人同様の権利が与えられるべきことを訴えて政治的な活動であるナイアガラ運動を組織し、そして全国黒人向上協会(NAACP)の創設に関与し、また高等教育を受けた黒人知識人が中心となり人種主義による不正な社会を改革していくべきであると考えた⁶。

本稿は、このように同時期に南北で活躍した黒人指導者間で異なる二つの型の教育が提唱されたことを踏まえ、この二つの型が実践された歴史的事例として、教養教育から実業教育への転換を20世紀転換期に経験した、サウスカロライナ州セントヘレナ島のペン学校に焦点をあてる。ペン学校は、別稿で論じたように南北戦争中に開始された北部による南部「再建」における解放民関連事業においては元奴隷への学校教育の旗船校として政府から「実験」として参照されただけではなく、その後20世紀転換期には教育方針・内容を大きく変容させたために、以後国内だけではなく海外からも参照されるようになった⁷。ペン学校の教育内容の変容とは、デュボイスが「ニューイングランドの教育」と絶賛したような初期の伝統的な教養教育から、ブッカー・T. ワシントンやワシント

ンの恩師でありハンプトン学院の創始者であるサミュエル・アームストロングが提唱したような職業訓練、農業・産業・実業教育への質的な転換であった。ペン学校は20世紀転換期には校長・副校長の世代交代を経て、転換後には、ハンプトン学院、タスキーギー学院と並び、実業教育を中心とした黒人学校のモデルとなり、国内のみならず南アフリカをはじめとする諸国からの黒人（現地人）教育の良き例として参照された。

本稿は、特定の黒人教育モデルの移動の意義を考察する前段階として、ペン学校が教育内容を大きく転換するプロセスを実証的に明らかにし、ペン学校における教育モデルが南アフリカにおいて導入される背景を明らかにすることを目的とする。

2 教養教育から実業教育への転換

2-1 黒人教育の類型

ペン学校における教育内容の質的な転換の背景を考察する前に、まず先行研究を通して、黒人教育の類型を確認する。ジェームズ D. アンダーソンは、米国の黒人教育に関する通史的研究の中で、教育内容によって次の4期に区分した。第一期は1860年から1880年で「南部における元奴隷と普遍的な教育の興隆」期、第二期は1868年から1915年の「産業教育のモデル校としてのハンプトン職業学校」の発展期、第三期は1880年から1935年の「黒人の公立学校、南部・都市部におけるカーストの再生産」期、そして第四期は1900年から1935年の「南部の師範・訓練学校」、「黒人を対象とした公立学校」、「高等学校における黒人とリベラル文化の教育」の各台頭期である⁸。本稿で扱うペン学校は、86年間存続した息の長い学校であったため、アンダーソンによる分類のうちそれぞれの教育類型から影響を受けたと同時に、それぞれにパイオニアとして影響を与える存在でもあった。また特に第三期の「南部・都市部におけるカーストの再生産」期における黒人教育に関して、南アフリカ史家でペン学校に関する考察を行ったハントディヴィスは次のように定義している。「カースト教育とは（肉体労働の訓練などの）産業教育に基づいて行われており、白人支配に刃向うことなく黒人が白人のニーズに応えなければならない白人支配社会において黒人が従属的地位にふさわしくなるようデザインされていた。南アフリカのような植民者による支配社会（settler society）において、そのような学校教育は白人教育者にとって理想的であるとみなされたのである。」⁹

このように職業学校へペン学校が転換したことにより、「カースト教育」として南アフリカの教育官吏の間で、アフリカ人のモデルとしてふさわしいものとして受け入れられたと結論づける前に、ペン学校が転換を迫られた背景や転換のプロセスを次項から丁寧にみていきたい。

2-2 初期のペン学校における教養教育

初期のペン学校における教育は、白人・黒人の垣根なく解放奴隷に対して白人教師の受けた伝統的な教育内容を教授し、人間性を重視する教養教育的要素のために、W. E. B. デュボイスから「ニューイングランドの教育」として絶賛されたそれであった。デュボイスは、解放された奴隷たちに対して献身的に教育活動に勤しんだ（大半がニューイングランド地域出身の）女性教師たちとその教育内容を次のように讃えた。

破壊と略奪の霧の背後から、困難に立ち向う勇気をもった婦人たちの更紗木綿の衣裳がひるがえり、野砲が荒々しく轟いた後に、アルファベットのリズムがひびきわたった。富める女たち、貧しい女たち、すべてが、真剣で探究心にもえていた。父を失い、兄弟を失い、さらにそれ以

上のものを失いながらも、彼女らは、南部の白人と黒人の間にニューイングランド式の学校をつくりあげることに生涯の仕事をもとめてやって来た。彼女らは、その事業を立派に遂行した¹⁰。

これは解放された黒人へのニューイングランドの贈物であった。施しものでなく、友として。現金ではなく、人格として。(中略)これらの学校の教師たちは、黒人たちをそれまでの身分におしとどめるためではなく、奴隷制の泥の中どころげまわったあの汚辱の場所から、彼らをひきあげるためにやって来たのである。かれらが基礎をかためた大学は、ソシヤル・セツルメント社会事業団体であった、つまりいわば解放奴隷の最良の息子たちがニューイングランドの最良の伝統と親しく共感をもって接触する家庭であった。彼らは、寝食をともにし、夜明けの光のなかで、研究し、労働し、希望し、耳を傾けたのである。その教科課程は、実際の形式面の内容からみれば、疑いもなく時代おくれのものであった。しかし、その教育の影響力ははかり知れないものがあった。なぜなら、それは生きている魂と魂の接触であったからである¹¹。

ここでまず、ペン学校の設立の経緯と初期の教育内容を確認しよう。別稿においても紹介したように、北軍占領下のサウスカロライナ州シーアイランズのセントヘレナ島で1862年6月までに、プランテーション小屋を校舎として約30の小さな学校が開かれ、その中で生き残った一校がペン学校である¹²。初日の生徒は大人9名で、数週間後には47人の記録がある。初代校長ローラ・タウンはクエイカー派の奴隷制廃止団体によって派遣されたボストン出身のギャリソン派アボリショニストであり、解放直後の奴隷たちの実質的な救助・支援を行ったポートロイヤル委員会の代表でもあった。急進的再建期後には北部出身教師の多くが教育活動をやめて北部の自宅に戻ったが、タウンは同僚のクエイカー派のエレン・マレーと共に生涯島に留まり、ペン学校や近隣の公立学校において黒人への教育活動を続け、90%以上が黒人人口である島民の生活に大きな影響を与えた。

初期のペン学校における教育内容を見てみると、他の学校同様文字の読み書き計算などの基本的生活のために必要な能力の習得をした上で、次第にアメリカ史、生理学、数学、地理学、文学、音楽、演劇、文法、作文の授業へと進み、レベルに応じて歴史、詩、政治経済の授業へと発展させた。1889年には政治経済の授業で、資本、労働、賃金について教えており、他の解放民学校が識字学習や朗読、算数やアメリカ史を教えた程度であったことと比較すると、ペン学校は多様な科目の授業を行っていたことがわかる¹³。

教師はより高いレベルの教育を提供していることに自信を持っており、他の解放民学校が小学校レベルの教育内容であるのに対して校長のタウンは高校レベルのことを教えていると自負し、実際に他校との数学、詩の暗唱、地理のコンテストではペン学校の生徒が毎回優勝していた記録が残されている。副校長のエレン・マレーは教育と文学を専門としていたので、上級クラスの生徒には英語の授業で有名な文学作品を扱ったり、作品を創作させたりした。マレー自身も、「黒人高齢者サミュエル・フィリップスの死」、「ガブリエル」、「バーナードの死」、「ウェンドル・フィリップス」、そしてロバートG. ショー将軍とワグナー城砦での黒人隊列マサチューセッツ第54連隊についてなどの作品を残している¹⁴。卒業式や発表会、クリスマス会では、それらの作品を劇にして教師・生徒ともに演じたり、詩を暗唱し、歌や踊りの披露のために1～2ヶ月をかけて準備をした。発表会場は毎年観客で満員になり盛り上がったが、このような場は黒人生徒の知性や才能の披露を通して、ペン学校における教育の効果を自他ともに確認する機会となった。

2-3 ペン学校における産業教育への転換の背景

ペン学校における教育内容の転換は1870年代後半からの資金提供先が援助の打ち切りを決定したことと、同時期に主要援助団体のメンバーによる職業訓練・産業教育受け容れの圧力を受けたことが発端である。すでに1868年12月に師範学校（教師養成課程）を、そして1869年11月には幼児教育の授業をはじめていたが、1870年代後半の財政難を受けて、それまでタウン校長は産業教育に対して難色を示していたものの、1879年11月には女子生徒を対象とした裁縫の授業（最初はキルト作りを行った）を開始せざるを得なくなった。さらに1890年には新たな産業教育のプログラムを加え、ペン学校は6部門に分かれて運営が展開されるようになった。師範教育、中等教育、グラマー教育、初等教育、幼児教育、そして産業教育の6部門であり、産業教育のプログラムには裁縫、大工、ピケットフェンス作りの授業が含まれた。同時に学校の名称をペン師範・産業学校に変更し、学校の目的を無償の初等・中等教育の提供に加え、島の他の学校の卒業生たちも対象にして、州の公立学校教員試験の準備のための教育を提供した。

このように、20世紀転換期には従来の教育内容から大きな転換を迫られるペン学校であるが、奴隷解放期の初期からペン学校の校長として教育に専心してきたローラ・タウンは、黒人に対する産業教育の初期の提唱者であるハンプトン学院の創立者サミュエル・アームストロングの教育方針に対して異なる意見を持っていることを教育資金提供者への手紙において示唆しており、ペン学校における職業訓練・産業教育の導入には慎重であった¹⁵。そのようなタウン校長の方針に反して、北部フィラデルフィアの援助団体は繰り返し実業・産能教育の重要性を訴えた。1879年1月に、財政難からその半年後に解散することになったペン学校の資金援助団体であるペンシルヴァニア解放民救助協会の副会長フランシス R. コープは、周囲の南部黒人学校の教育内容に関する近年の変化を強調して、タウン校長に次のような手紙を送っている。

我々は、[セントヘレナ] 島において機械技術を男子生徒に教える機会がないように感じておりますが、しかしながら南部の他のすべての地域においてそのような教育が行われているので、[ペン学校でも] 行うべきだと考えています¹⁶。

さらに、同手紙において、産業教育推進のために、ペン学校の設立当初の目的を解放民に対する「食糧物資の配給などの救助活動と聖書の教示」という従来の内容に加えて、「産業と家政の技術を解放民に教えるため」であったと新たに解釈することで設立目的の内容を書き換えている¹⁷。

同様に、コープ氏の秘書であるハナ B. エバンズは、タウン校長に宛てた書簡の中で、女子生徒を対象とした裁縫のクラスができたことを高く評価し、「労働者階級」を対象とした訓練のための授業が家政・家庭経営学などに加えて必要であると述べている¹⁸。また、次のように、他の産業学校の様子を良き例として紹介した。

数日前に、サウスケンジントンの料理学校と関わりのあるイギリス人のドッド婦人が、実践的な講義をする2つのコースを教えていることを知りました。一つ目のコースは労働者のためのもので、授業料は一回につき8セントです。これはすばらしい試みで、私は労働者の女性がこのようなクラスを受講し、安くておいしい料理の仕方を学ぶことが望ましいと思います¹⁹。

このように、ペン学校の資金援助団体の主要メンバーは、ペン学校が労働者育成のための職業訓練・産業学校として展開していくことを勧めたが、タウン校長はこのような産業教育導入の流れに

対して戸惑いを隠すことができなかつた。実際、同年に家族に宛てた手紙において、「裁縫学校をどうしたらいいのかわかりません。11月1日に始めることになるのですが」などと複雑な心境を吐露した²⁰。このようにタウン校長と学校の資金援助団体のメンバーの間には黒人生徒を対象とした教育内容に関して齟齬が存在したものの、タウン校長はそれを明確にして団体幹部と対立することはなかつた。財政援助なしでは学校の存続が危ぶまれることを理解していたタウン校長は、その点については反論せず黒人生徒の知性や能力に関する具体的かつ肯定的な内容を北部に報告することで黒人教育に対する自らの信念を主張し、南部黒人教育の意義を訴えるという手法によって、ペン学校に対する財政援助を途絶えさせずに、学校の生き残りをはかつたのであった。

しかしながら、生涯をペン学校における黒人教育に捧げた初代校長であるタウンが、1901年2月に亡くなると、タウンのパートナーであるエレン・マレー副校長は健在であったにも拘らず、その直後からペン学校理事会の委員であり、ハンプトン学院の校長ホリス・パーク・フリッセルが影響力を拡大し、ペン学校の再組織化に着手した。1904年には、フリッセルは自身の教え子でありハンプトンの教師である女性ローザ・クーリーをペン学校の校長に、グレイス・ハウスを副校長に据え、カリキュラムもハンプトンの創始者アームストロングの教育論を参照し大幅に変更させたのである。

2-4 ペン学校における産業教育への転換後の教育内容

前項でみたように、当初ペン解放民学校と呼ばれた当校はすでに1901年にペン師範・産業・農業学校 (Penn Normal Industrial and Agricultural School) へと名称を変更しており、指導者トップの交代により学校運営だけでなく授業内容も大きく変えた。「農業的ユートピアの実現」がモットーとして掲げられ、黒人コミュニティ自らによる自給自足や生産性の向上が学校の第一の目的とされ、健康、衛生、栄養、耕作、飼育、家庭管理の分野に新体制下のペン学校は重点を置くようになる。

また、クーリー校長はセントヘレナ島全体を一つの家庭にたとえた。島全体の家庭一つ一つの中に学校を位置づけただけでなく、島の社会全体の中心として学校の隣に位置する教会を通して宗教的機能を持たせ、同時にコミュニティ行政の中心的機能も担わせた。別稿でイメージを取りあげたように、「総合的コミュニティとしての学校」図は学校の紹介パンフレットに印刷されて配布されたが、具体的には、学校が島全体にとっての共通の家庭であり、農場であり、教会であり、工場（製作の作業場）であろうとしたのである²¹。

また革新主義時代にさしかかつたペン学校は、当時大きな影響を持ちつつあった進歩主義教育の原理を取り入れた。生徒たちの生活に根ざして、実践を通して経験から学ぶことを推奨する進歩主義教育は、後述するような島の特徴を生かした教育内容（パンフレット「なぜペン学校は魅力的なのでしょう？」参照）の実践を謳う学校の方針と極めて親和的であった。これに伴って授業内容は、健康、衛生、栄養、耕作、飼育、家庭管理、助産師の訓練、かごの製造、デイケアセンターの運営、祈りの家における宗教的コミュニティ活動を中心とするようになった²²。またペン学校と進歩主義教育の結びつきを表す史料として、進歩主義教育思想の代表とされるデューイの秘書からの手紙がペン学校文庫に残されている。

島の子どもの数は全体で2000人であるが、タウンとマレーの二人がペン学校に着任してから40年間ペン学校の生徒数は毎年約250人であった²³。ペン学校での教育内容は生徒が家庭に持ち帰り、家庭で実践されることが多かつたとされる。生徒が学校で学び一時的に知識を蓄えるだけでなく、学校が家へ移動するという形式をとり、教師やチューターグループが各家庭を定期的に訪問して多岐にわたる指導を行った。その結果、各家庭のメンバーが学校で行われている授業内容や意義を充

分に理解し、学校を支援するようになり、学校と家庭の連関関係を築くことが可能となった。このような連携がみられた授業内容は、具体的には農業、看護・医療、家政がある。1910年代になると看護学の教師は、午前中に衛生学を講義し、学校の医務室で診察を行った後、午後にはあちこちのプランテーションを巡回して診察を行った²⁴。

次に具体的な授業の内容を見ていく。産業教育の一つである大工の授業では、ハンプトン学院出身のダウキン教授の指揮下で、ペン学校の男子生徒が、実際にペン学校の小さな図書館、教師の家2軒、作業場等を建設した。またペン学校周辺地域は農業を営むプランテーションであり、学内にも農場を作り、農業の実践をしながら授業が行われ、耕作や作物の栽培に関する最新の知識と実践による地域への貢献が目指された。さらに、農作物の販売において欠かせない技術であるとして商取引 (trade) の授業も導入された。商業は、卒業後に島を出て生計を立てていく際に有益であるとされた。

女子に対する教育は、大工の授業を担当したダウキン教授の妻によって行われた。ダウキン婦人は看護師の訓練を受けたので、女子生徒に食事療法や病人の看護の方法、また調理やホーム・メイキングを教えた。ペン学校における女子教育は大きく次の3つを柱とした。

1. 家政プログラム (具体的にはホーム・メイキング、裁縫、洗濯、服飾・キルト作り)
2. 看護・健康・栄養・衛生プログラム (具体的には病人の看護、食事療法、助産師の育成、調理、缶詰作り、育児所の運営)
3. 児童クラスの教師養成プログラム (卒業後には地域の学校において教師職に就くことが保障されていた)

初期のペン学校の経営資金は学校長等の縁故や奴隷制廃止団体等の教育支援組織に頼っていたが、20世紀転換期の世代交代後には、実業教育中心のカリキュラムへと変更したため、新しい教育プログラムを実施するための新たな需要が生まれた。具体的には、新たな科目を担当する教師、産業・農業・職業訓練の実践のための建物、設備、道具、教材等である。設備のメンテナンスにも経費がかさむ。このことを認識していた新しい校長や理事たちが、寄付金の呼びかけをパンフレット等の宣伝や広告を利用して行った多数の記録が残っている。具体的にその中の一つを見てみると、経営費\$5000、産業教育を行う建物の建築費\$8000、教師の自宅建築費\$2500、農業用建物費用と設備機器費用\$1500-2000などが即座に必要な費用としてあげられた²⁵。さらに、寄付を募る宣伝用パンフレットには、上部中央で「なぜペン学校は魅力的なののでしょうか？」と問いかけ、以下のように同学校を支援する理由10点をあげた。

1. 島にあるから
2. シーアイランド地域のコットンが育つ地域にあるから
3. ハンプトン学院の支援を受けているから
4. ペン学校の農夫は、国の農務省のデモンストレーション・エージェントであるから²⁶
5. 従来と比較して、とうもろこしの生産量を3倍に増やすことができたから
6. 島の農家が栽培したサトウキビを学校でひくから
7. 学校が農家共同協会を組織しているから
8. 牡蠣の殻を粉砕したコンクリートで、産業クラスで建物 (名称: コープ産業校舎) を建築したから

9. サウス・カロライナ州による〔農産物の〕品評会で2つの賞を受賞したから
10. 事務所がフィラデルフィアにあるから²⁷

ペン学校の教育目的として、第二代目の校長であるクーリーは、国家に貢献することのできる黒人を育成することと、そのための教育をトレーニングを受けた黒人男女指導者によって行うことの2点を掲げた²⁸。このような必要性が主張される背景には、いわゆる「黒人問題」が存在する。ハンプトンやタスキーギーの教育同様、「黒人問題」に対処するために、白人がよしとするような価値観を黒人に植え付け、黒人の行動を改善するために行われた²⁹。そのような目的に沿った教育のプログラムの根幹には道徳教育が存在した。すなわち、白人社会の「脅威」ではない存在として、またそのように黒人が進歩・向上できることを「教育実験」を通して証明し、社会そして国家に対してその成果を提示する必要がある。また自助を重視した点も注目に値する。例として、ハンプトン学院における自助プログラム下において、学生たちは学内における自らの労働によって、学費や寮費、制服代等を支払った。

ハンプトン学校やペン学校において、産業教育の目的として掲げられた有能な労働者育成とは、例えば近代化以降の工場へ卒業生を労働者として送りこむための準備としての職業訓練という意味合いに加え、そのような近代的な労働者としてふさわしい価値観、すなわち内面の規律や勤勉さや節制、従順さ、礼儀正しさ、協調性、近代的な衛生の概念を身に着け、当時白人中産階級の間で規範となっていた男女別役割分業を習得することにより品性を証明するための広義の意味での道徳教育であったといえる³⁰。

2-5 黒人への実業教育推進

ペン学校に関する既存の研究が指摘したように、「産業教育の動機は、白人至上主義の畀に黒人を陥れようとするものではなかった。」³¹しかし、伝統的な教養教育をやめて産業教育を中心とするようになったペン学校からは、やがてアカデミズム批判を行うものも出てくる。そこでは、教師が単なる知識人であることが否定されて、地域に根差した実践的な学習者であることが強調されるのである。ペン学校の理事会の秘書であったハロルド・エバンズは、ペン学校への寄付を募る際に、『サーヴェイ』誌に掲載されたジョセフK. ハートの文章を元にパンフレットを作成したが、その中で「この学校の科目はアカデミックであることから救われている」と記述した。ペン学校における「教育は生活における包括的な過程の一部であり、子どもと大人で同様に分かち合うべきものとして理解されている」と評価した。教師が教育の場を各家庭へと移す際に、子どもだけではなく大人も指導することが可能なのは、「教師がオリンピアの高みに住み、難解な専門家の言葉を使うからではなく、単に教師は島のある場所で「昨夜、農夫が同じような問題に賢く対処している様子を見た」からであり、ちょうどそのテーマに関する新しい論文を読んだからであり、教師の自宅の庭や「実験室」である学校において同様の問題に取り組んだ経験があるからである。さらに、ハートは、かつてペン学校で教えられていたラテン語や代数学が、土壌や作物に変化したと誇らしく述べ、土の耕作や作物の栽培を実際に行い、またそれらに関する知識や教育を学校が重視していることを称賛した。ハートのようなアカデミズムの批判者たちにとって、もはやペン学校は「軽く空想的で、高貴で純粹で見当違いな」普遍的な教養教育の被害から免れたのである³²。

一方でこのようなハートの記述には、教育を通して黒人を社会の低位に位置付けようとする力学の働きが読み取れる。同じ文章の後半において、高いレベルの学校におけるラテン語や代数学の学習を認めているのである。これらの科目は知的な計画に基づいて人生設計を行うことを可能とする

と指摘している。つまり、黒人にとって「見当違いな」教育内容であるラテン語や代数学が、白人生徒を対象とした高いレベルの学校においては広い視野を獲得することのできる科目として推進されているのである。ここには人種によってふさわしい教育内容があるとする認識に加え、より具体的に黒人には低いレベルの教育内容がふさわしいとするハートの意識が表出されている³³。

20世紀以降のペン学校に関する研究を行ったエリザベス・ジェイコウエイは、「ペン学校は、島民にとって唯一の外部世界とのつながり」であったことを指摘し、結果として学校に権威とコントロールが集中し、地元黒人住民の間のリーダーシップを育む機会を奪い、黒人たちの才能を正当に評価することができず、そのパターンリスティックな性質故に結果としてペン学校に「毒を塗った」と評価している³⁴。

ここまで見てきたようにハートの教育に関する見解等の史資料やジェイコウエイやハントデイヴスの研究から明らかになるのは、デュボイス型の教育は黒人にとっては高度すぎるために「見当違い」であり、ワシントン型こそ黒人を白人に従属させるために都合のよいプログラムであるとし、黒人にふさわしい教育内容を決定し、黒人をコントロールする白人の差別的な人種意識であった。

3 教育モデル移植の背景

3-1 黒人教育モデルとして

ペン学校が国外で参照される以前には、国内においても注目されていた。当時の大統領の妻であるエレノア・ローズベルトは『リーダーズ・ダイジェスト』誌上の巻末言で読者にクリスマスの寄付を呼びかけているが、その際にタスキーギー学院、ハンプトン学院、カウフーン学院と並んでペン学校をあげている。そして、「これらの学校は黒人が必要としていることを認識しているので、あらゆる種類の有益な品物を贈るのに最適である」と推薦の言葉を述べた。「クリスマスは一年のなかで、物を所持するよりも与えることのほうがはるかに恩恵を受けるということを私たちが思い出すべき季節です」と結んで、一人でも多く的一般の人々が黒人学校へ寄付することを奨励した³⁵。

また、卒業生がペン学校と他校との関係を形成しようとした例が、1921年5月のペン学校の機関誌に描写されている。それによれば、卒業後にサバンナで就職して大成功したサデウス・ワトキンズが、クーリー校長にジョージア州立大学の関係者たちにペン学校を紹介するために学校等の写真を送るように依頼し、写真送付後には、再度手紙でサバンナの街の生徒たちをペン学校に送りたいとする声があると述べた。同じ誌上でクーリー校長はペン学校は地方の子どもたちのために存在する学校であるので、街の生徒たちの入学は残念ながら受け入れることのできない旨を明確にしているが、このように一個人の働きかけによる草の根の形でもペン学校はモデルとしての働きを担った例がほかにも多くみられる³⁶。

国外、とりわけアフリカにおけるペン学校の教育モデルとしての注目については、チャールズ・ロラムとトーマス・ジェシー・ジョーンズという二人のアフリカ教育行政における代表人物を抜きにしては語れない。アフリカ諸国と米国を横断する思想的運動であるパンアフリカニズムと教育哲学に関する研究をおこなったケネス・キングは、両世界大戦期のアフリカの教育において最も重要な影響を与えた3名として、ロラムとジョーンズに加え、国際宣教協議会のJ. H. オールドハムを挙げているが、この3名のうちの最初の2名であるロラムとジョーンズは数多く存在する米国の黒人学校のなかでも、規模が大きくて有名でより高いレベルの教育を提供するハンプトン学院やタスキーギー学院ではなく、小規模で田舎にあるペン学校をモデルとして重要視したのである³⁷。

ハントディヴィスによると、19世紀半ば以降、人種差別的な優生思想に基づいたエセ科学的人種主義が広まるにつれ、白人・黒人間の教育内容に差を求める考えが黒人教育に携わる白人の教育関係者の間で主流となった。黒人の学校教育の内容が白人のその「真似」になるべきではないと主張されるようになった。白人に対する教育のように高度で普遍的で学術的なカリキュラムは、黒人に対するカリキュラムとしてはふさわしくなく、黒人という人種が抱えている「深刻な性格的欠陥」に対処するというニーズにそくした教育内容、さらに黒人が直面している貧困による困窮状態改善のためには「精神的文化や道徳面において優れている」教師と、肉体労働の導入・訓練をすることが必須であると認識されるようになり、このような黒人教育観が白人の宣教師、政府官吏、フィランソロピスト等の間で共有された³⁸。

そのような文脈のなかで、より大規模で有名なハンプトン学院やタスキーギー学院と比べて、田舎の島の小規模な学校であるペン学校が南アフリカにおけるアフリカ人教育のモデルとされたのには、20世紀転換期における教育内容の変容後には、農業や職業訓練教育に加え、アカデミックな教養教育ではなく、初等レベルの教育内容と、性別によって異なるカリキュラムが提供された点にあるのではないかと。また、黒人の教師養成プログラムも展開されたが、このプログラムが推奨された理由はより高度なレベルの教育を提供しようという意図よりは、黒人生徒には白人教師ではなく黒人教師をあてがおうとする、学校という物理的空間における人種の線引きをする意図が存在するのではないかと。付言すれば黒人の学校における教師養成プログラムが高度なアカデミックなカリキュラムではなかったことは、Normal Schoolという呼び名からも明らかである。Normal Schoolとは、規範（Norm）を教える学校という意味に由来しており、教師が道徳などの「規範」を生徒たちに手本となり教えるべきであるという考え方が背景に存在していたのである。

3-2 南アフリカにおける米国黒人教育の意味

別稿で指摘したように、南アフリカの官吏であり国を代表する教育学者のチャールズ T. ロラムが、「ペン学校の学生1000人がいれば、我々はアフリカを変革することができる」と述べた時に、そこにはワシントン型黒人教育に転換後のペン学校の教育方針への強い信頼感が存在している³⁹。では、南アフリカのアフリカ人に対する教育モデルとしての実業教育への信頼感はどこからくるのだろうか。

ネルソン・マンデラ元南アフリカ大統領を輩出した活動組織ANC（アフリカ民族会議）の前身であるSANNC（南アフリカ原住民族会議）は、アフリカ人の権利をないがしろにする白人擁護の政府に対して、1912年2月にブルームフォンテインにおいてアフリカ人の権利保護のために組織された⁴⁰。SANNCは、キリスト教会による学校を卒業したエリート組織であり、設立時のメンバーの大半が聖職者であったが、ナタール出身の教育学者ジョン L. ドゥーベを議長として結成された⁴¹。このドゥーベが信奉したのが、ブッカー T. ワシントンであった。米国留学中にタスキーギー学院の校長であるワシントンと学院を訪れて感銘を受け、この学校をモデルとして1901年にはナタール州ダーバン近郊にオハラング学院を創設した⁴²。SANNC創立時の議長就任のスピーチの冒頭では、ドゥーベはワシントンを「私の守護聖人」であり、「偉大なる啓蒙者」であると述べている⁴³。その理由は第一にワシントンが「アフリカの息子たちの中で最も有名で最良な生き証人」であり、第二にドゥーベ自身もワシントン同様アフリカ系の人種のための教育に心血を注ぐ覚悟であり、教育によってアフリカ人の精神的、道徳的、物質的、社会的、政治的状況を改善できるという信念を語った⁴⁴。このようにドゥーベはアフリカ人の政治的解放と権利獲得・回復のためにアフリカ人に対する教育の重要性を認識していた。

ドゥーベはアフリカ人の政治的な解放・権利を教育の目的としており、ワシントンの教育思想をモデルとしたが、米国における実際のワシントン型教育においてはこのような政治的な要求はタブー視されていたのである。まさにこの点が、対するデュボイス型との相違点であった。

1948年の国民党 (NP) が与党の連合党に勝利した総選挙をきっかけに悪名高い人種隔離政策であるアパルトヘイト体制の時代が幕を開けたことは周知の通りである。アパルトヘイトという用語そのものは単に「分離」を意味しているが、これが選挙運動におけるNPのスローガンであったために、勝利後に政府の指針となり、後にも政権維持のために人種隔離政策と共産党の弾圧を行った⁴⁵。この体制の中で1953年に制定され、実施された「バンツール教育法」は、主にアフリカ人に対する教育の管理を強化した。この教育制度下でアフリカ人の就学率は増加し続けたものの、その教育内容はアフリカ人を対象とした場合「白人の経済のために役立つ技術者教育に限定すべき」(傍点は筆者)とされ、教育レベルも初等教育第4学年までの教育で十分であり、より高度なものは必要ないと考えられた⁴⁶。

上林朋広が、同様にワシントン型教育を南アフリカに導入しようと試みた教育者D. D. T. ジャバヴとドゥーベを比較考察する論考において、両者とも白人政権による人種隔離による「状況が悪化する中でアフリカ人の経済的自立性と政治的影響力を確保しようとし、そのためにワシントンあるいはタスキーギ学院をモデルにしたという、両者の共通点を指摘」した上で、さらに「白人側の支配的な言説に寄り掛かった形で自分の主張を展開する型の一つとして、タスキーギ学院に体现される南部黒人教育思想が利用された」と述べたように⁴⁷、南アフリカにおける特定の米国黒人教育モデル導入の意味は米国において導入された文脈同様、アフリカ人の自立と権利獲得のためのカモフラージュされた政治的闘争であったことに加え、まさに自らの生命の生き残りをかけた戦略でもあったのである。

4 むすびに

本稿で述べてきたように、保守的とされるワシントン型の教育が、よりラディカルなデュボイス型教育よりも黒人教育としてふさわしいとされる背景には米国のペン学校においても、また南アフリカにおいてもそれぞれ独自の複雑な歴史的な文脈が存在した。すなわち、一見非政治的なアプローチである教育方法の導入を通して、極めて政治的な闘いをそれと感じさせないよう安全な方法で遂行させようという意図が潜んでいた。換言すれば、そのような形でしか現状の改善が望めないような深刻な人種主義と暴力が背景に存在していた。黒人に対する同じワシントン型教育を、白人指導者は「黒人問題」の解決手段、また黒人の管理とコントロールの有効な方法と認識したのに対して、黒人指導者は独自のスペースの確保や、自立や権利獲得、生き抜く手段や機会と捉えた。

しかしながら、冒頭のエピローグにおいてデュボイスが問うたように、物質中心主義による熱狂に踊らされている「気狂いじみた帝国主義的風潮」のなかで生まれた傾向(この傾向をデュボイスは「人間を国土の物資的資源の同類とみなし、将来の配当だけに目がむくように人間を訓練しなければならないと考える傾向」と説明している⁴⁸)にそぐうような教育とは、黒人に対するものは、社会に内在する人種差別的要素故に、「不吉なきざし」が見られるものにならざるを得ない。よって、米国南部における人種隔離制度を目の当たりにして、デュボイスは黒人教育の教養教育から実業教育への完全なる転換を人種差別構造を強固にさせる一因であるとして嘆くとともに、黒人の魂(精神)へ与えるダメージを次のように憂慮した。「褐色人種と黒色人種を現在の彼らの「身分」のままとどめておこうとする人種偏見は、奮闘努力している人間の野望を大いににぶらせ、その心を

ひどくめいらせる力をもっている（後略）。⁴⁹そして、教養教育こそ、「向上心を刺戟する教育」であり、「理想のなかでも最高の理想が設け」られており、「パンを得ることよりもその究極の目的として教養と品性を身につけることに意義を求める教育」であると述べた⁵⁰。さらに教養教育は「白人の特権」として存在しており、黒人にとっては「危険で思い違いをさせるものである」という主張があちこちでなされていることに、危機感を表したのである⁵¹。

これら2つの代表的な黒人教育の型を対立したものとして描出した黒人史家オーガスト・メイヤーの研究書が、1963年に出版されたことを考慮すれば、メイヤーは公民権運動の中における2つの方法論（キング牧師に代表されるような人種関係における協調をめざす融和的立場と、マルコムXにみられるような黒人の独立を謳う非妥協的立場）の対立という当時の文脈を理解するためにパラレルとも捉えられる過去の対立を参照していたのかもしれない。同様に、経済を優先する特定の視点からの教育評価が覇権的になりつつあり⁵²、「市場志向」で「競争」や「成果」が重視される現代日本の教育状況の意味を理解し⁵³、そのような教育の「ニーズ」が謳われる背後にあるものを見極めるために、多様な視点からの教育評価を導入し、特定の型の教育が覇権的になる「気狂いじみた風潮」や「傾向」に反応し必要ならば対抗するために、過去の教育モデルの移植の事例が示唆することから学ぶための作業が今こそ求められているのではないだろうか⁵⁴。

-
- 1 W. E. B. デュボイス（木島始、鮫島重俊、黄寅秀訳）『黒人のたましい』（岩波文庫、1992年）、133頁。
 - 2 August Meier, "The Divided Mind of the Negro, 1895-1915," *Negro Thought in America 1880-1915: Racial Ideologies in the Age of Booker T. Washington* (Ann Arbor: University of Michigan Press, 1963), 169-278.
 - 3 上杉忍『公民権運動への道—アメリカ南部農村における黒人のたたかい』（岩波書店、1998年）。日本人研究者による古典的な黒人史研究であり、序論における次の指摘は示唆に富む。「政治制度あるいは暴力体系は、その社会の規範に支えられてはじめて機能する。その社会的規範の分析の際には、特に大プランターと経済的に利害が対立することが多かった白人小農民が、なにゆえに「白人共同体」に包摂され、階級対立を顕在化させることが少なく、黒人農民との連帯に向かうことがほとんどなかったのか、そのメカニズムの解明が鍵となる。そのためには、南部社会で独自に発展し白人民衆の中に深く浸透した南部文化の究明が必要である。すなわち、ごく一般の白人が積極的に肯定する白人優越の論理はどのようなものだったのか、民衆の意識に内在した検討が必要である。」（27頁）。
 - 4 Jacqueline M. Moore, "Booker T. Washington's 1895 Atlanta Exposition Speech (1908 recreation) : Added to the National Registry: 2002," LC.
 - 5 Lee D. Baker, *From Savage to Negro: Anthropology and the Construction of Race, 1896-1954* (Berkeley: University of California Press, 1998), 61.
 - 6 大森一輝『アフリカ系アメリカ人という困難—奴隷解放後の黒人知識人と「人種」』（彩流社、2014年）。
 - 7 拙稿「解放民教育「実験」と他者形成」『歴史評論』707号（2009年3月）。
 - 8 James D. Anderson, *The Education of Blacks in the South, 1860-1935* (Chapel Hill and London: University of North Carolina Press, 1988).
 - 9 Richard Hunt Davis, Jr., "Producing the 'Good African': South Carolina's Penn School as a Guide for African Education in South Africa," *Independence without Freedom: the Political Economy of Colonial Education in Southern Africa*, eds. Agrippah T. Mugomba and Mougou Nyaggah (Santa Barbara: ABC-Clio, 1980), 84.
 - 10 デュボイス、『黒人のたましい』、43-44頁。
 - 11 デュボイス、『黒人のたましい』、140-141頁。
 - 12 拙稿、「米国再建期における解放民教育再考—ウィリアム・ペン学校教師による黒人コミュニティ理解を中心に—」『〈教育と社会〉研究』第13号（2003年）、40-48頁。
 - 13 Laura Towne to her family, May 22, 1889, Penn School Papers, SHC, WL, UNCCH; Robert Morris, ed., *Freedmen's Schools and Textbooks* (New York: AMS Press, 1980), 6 vols.; 辻内、『奴隷制と自由主義』、315-323頁。
 - 14 「ガブリエル」はセントヘレナ島の黒人奴隷で、林に逃亡して主人に捕まり、ひどく鞭打たれた後チャールストンの奴隷市場で売りに出されたが誰も購入せず、鞭打ちの数日後そのダメージから亡くなった。セントヘレナ島に住むベスおばさんの息子で、ベスおばさんを知るマレーは、ベスおばさん本人や周囲の人々からガブリエルの

- 話しを聞いて、詩にした。ベスおばさんはガブリエルが怒るからという理由で死の知らせを受けても泣かずに、「主よ、彼はキリストのもとへ行きました。神に感謝します」と祈ったのである。Diary of Laura Towne, June 13, 1862, Penn School Papers, SHC, WL, UNCCH.
- 15 Laura Towne to Francis R. Cope, Esq., January 9, 1873, Penn School Papers, SHC, WL, UNCCH.
- 16 Cope Brothers to Laura Towne, January 15, 1879, Penn School Papers, SHC, WL, UNCCH.
- 17 Ibid.
- 18 Hana B. Evans to Laura Towne, March 4, 1879, Penn School Papers, SHC, WL, UNCCH.
- 19 Ibid.
- 20 Laura Towne to T [her sister], October 26, 1879, Penn School Papers, SHC, WL UNCCH.
- 21 拙稿、「米国再建期における解放民教育再考」、45頁。「農業的ユートピアの実現」や、産業と教育の関連については、例えばベスタロッチの教育思想にもみられるように、ヨーロッパの特にプロテスタンティズムの影響の強い社会においては新しいものではないが、これと、米国の黒人教育で展開された産業教育の関係について教育思想史的な考察をおこなうことは今後の課題である。村井実『ベスタロッチとその時代』（玉川大学、1986年）、65-66頁；関啓子『クループスカヤの思想史的研究—ソヴィエト教育と民衆の生活世界』（新読書社、1994年）、69-75頁。
- 22 Elizabeth Jacoway, *Yankee Missionaries in the South: the Penn School Experiment* (Baton Rouge and London: Louisiana State University Press, 1980), 255; “Transcript of Tape,” Penn School Papers, SHC, WL, UNCCH, Box 54, Folder 464.
- 23 Jacoway, *Yankee Missionaries in the South*, 259.
- 24 Rossa B. Cooley, “Work among the St. Helena Island Negroes,” *Alumnae Department*, 1914, 105.
- 25 Board of Trustees, “Penn Normal, Industrial and Agricultural School: St. Helena Island, South Carolina,” Folder 443, Box50, Penn School Papers, SHC, WL, UNCCH.
- 26 ここでのデモンストレーション・エイジェントは、ペン学校の農夫によって育てられた農作物に関する実践・研究の成果は、国に報告されるため、ペン学校の農夫は国の農業政策に影響を与える主体であるという意識とプライドが感じられる表現である。
- 27 Philadelphia Office, “Penn School, St. Helena Island, South Carolina: Why Penn School is Interesting,” Penn School Papers, SHC, NC, UNCCH, Box 50, Folder 443.
- 28 Rossa B. Cooley, “Work among the St. Helena Island Negroes,” *Alumnae Department* (1914).
- 29 米国における人種問題を「黒人問題」とするのは、排斥する側の責任を被害者である中国系移民に転嫁する「中国人問題」同様に、白人権力による黒人支配を正当化するための巧妙なロジックである。19世紀後半の「中国人問題」を通して「白人性をめぐる人種の政治」が立ち上がり、米国が帰化不能外国人の概念を確立させて移民国家を誕生させたことを描いた歴史研究として次を参照。貴堂嘉之『アメリカ合衆国と中国系移民—歴史のなかの「移民国家」アメリカ』（名古屋大学出版会、2012年）。
- 30 当時の黒人教育において「品性」が重視されたことについては次を参照。Elizabeth Jacoway, *Yankee Missionaries in the South*, 255.
- 31 Jacoway, *Yankee Missionaries*.
- 32 Joseph K. Hart, “A School Somewhere,” *Survey-Graphic* (September, 1925).
- 33 Ibid.
- 34 Elizabeth Jacoway, *Yankee Missionaries in the South*.
- 35 Eleanor Roosevelt, *Readers Digest* (December 1937).
- 36 “Plantation Pictures from St. Helena Island, South Carolina Penn School” Volume I, Number 1, May 1921, Hampton University Archives.
- 37 Kenneth J. King, *Pan-Africanism and Education: a Study of Race Philanthropy and Education in the Southern States of America and East Africa* (Oxford: Clarendon Press, 1971); Hunt Davis, Jr., “Producing the ‘Good African,’” *Independence without Freedom*, 83-112; 拙稿「南アフリカ共和国における米国南部黒人学校の移植をめぐるポストコロニアル研究のためのノート：『ソフトな帝国主義』の背景」『国際地域研究論集』第4号（2013）、134頁。
- 38 Hunt Davis, Jr., “Producing the ‘Good African,’” *Independence without Freedom*, 85.
- 39 拙稿「南アフリカ共和国における米国南部黒人学校の移植をめぐるポストコロニアル研究のためのノート」『国際地域研究論集』、129-137頁。
- 40 ロスによれば、SANNC自体は「請願運動や代表団派遣といった伝統的な抵抗に終始したために」アパルトヘイト政策を実際に阻止できなかったが、ガンディー主導の植民地反対闘争と連動して、南アフリカのアフリカ人に対して自らの権利や政治的意識を覚醒させ、後のANC前身として歴史的に大きな役割を果たした。ロバート・ロス『南アフリカの歴史』（石鐘優訳）（創土社、2009年）、100頁。
- 41 同上。
- 42 上林朋広「南アフリカにおけるアメリカ南部黒人教育の受容」『歴史評論』792号（2016年4月）、46頁。
- 43 R. Hunt Davis, Jr., “John L. Dube: A South African Exponent of Booker T. Washington,” *Journal of African Studies*, Vol.2, Number 4, Winter, 1975/76, 497.

- 44 Ibid., 498.
- 45 ロス、『南アフリカの歴史』、128-132頁。
- 46 前掲書、134-135頁。
- 47 上林朋広「南アフリカにおけるアメリカ南部黒人教育の受容」、52-55頁。
- 48 デュボイス、『黒人のたましい』、133頁。
- 49 同上。
- 50 同上。
- 51 デュボイス、『黒人のたましい』、134頁。
- 52 例えば、文科省が積極的に参照軸としている国際学力調査PISA やAHELOなどの調査主体はOECD（経済協力開発機構）であることなど。
- 53 越智博美、河野真太郎「わたしたちの『いま』、わたしたちの『これから』—追悼・三浦玲—」『言語文化』No.52, (2016.1), 9-15頁; 佐藤学「安倍政権の教育改革と政策の特徴」『歴史評論』No. 791 (2016.3), 5-16頁; 世取山洋介「新自由主義教育改革の新段階と教育人権—安倍教育再生実行改革による新教育基本法の再始動—」『歴史評論』No. 791 (2016.3), 17-31頁; 山田哲也「PISA型学力は日本の学校教育にいかなるインパクトを与えたか」『教育社会学研究第98集』(2016年), 5-28頁。
- 54 本稿は、科学研究費助成事業（課題番号25870602）の成果である。